

公共構造物の適切な維持管理が大きな課題となる中で、その重要性を増すコンクリート診断士。今回は福井県コンクリート診断士会会長の山川博樹氏を訪ね、設立20周年を控える同会の取組みや昨年締結した地元鉄道との協定、今後の業界の展望等を伺った。

◆活動 福井県コンクリート診断士会は、04年3月に全国に先駆けて発足。以来、診断士の『社会的評価と地位の向上』および『コンクリート診断技術の普及と向上』を目指し、活動を続けている。発足時には10人程度だった会員は、現在、正会員が150人を超え、賛助会員も38人を数える。その間、現場見学会や診断事例発表等の研修会活動、外部講師を招いてのオープンセミナーなどを実施。「立ち上げから7期14年に渡り会長を務めた石川裕夏前会長の後を引き継ぎ、今後も診断士の資質、認知度向上のため、積極的な活動を展開していきたい」とと主力を尽くす構えだ。

◆貢献 診断士会では20年11月に、地元の福井鉄道、えちぜん鉄道

福井県コンクリート診断士会 会長

潮流

山川 博樹氏



資質と社会的評価向上へ全力

との間で「鉄道施設の検査・診断等の支援に関する協定」を締結。鉄道施設の検査や健全性判定、措置が必要とされる鉄道施設に対する対策方

針に関する指導と助言を行うほか、研修会等にも協力する。地域鉄道との支援協定は全国初で「昨年度はえちぜん鉄道の検査や判定、対策に対

する助言をさせていただいた。専門知識を活かし、地域貢献に努めたい」と抱負を口にしている。

◆品質 今後は、従来の劣化した構造物に対する

対策に加え、新しく作る構造物の品質向上にも力を入れたい考

え。事後保全から予防保全への転換を図るため、新しく作るものに対する品質管理が重要と指摘。「最初に作った品質が良く、さらに定期的なメンテナンスを行っていけば、コストを抑えつつ、長寿命化を図ることができる」と意義を強調する。

◆若手 インフラ施設の老朽化が進み、コンクリート診断士の需要が確実に増加する一方で、高齢化や若手入職者の減少による人手不足が懸念される。解決に向けては、入職者の増加はもちろん、検査等の機械化、ロボット化も必要不可欠。「今後は新しく、最先端の技術が生かされる」と展望し「若い人が抱いているであろう『土木』のイメージとは異なる仕事となっていく。ぜひ、興味を持ってほしい」と呼びかけた。

「事後保全から予防保全に」

やまかわ・ひろき 49歳。M・T技研取締役専務。18年に福井県コンクリート診断士会会長に。診断士について「一口に構造物と言っても、場所や形状により同じ劣化は一つとしてない。だからこそ適切な判断が求められる」とやりがい話す。大野市出身、福井市在住。